

P-37 クラミジアトラコマチス血清型別による臨床的な意義の検討

虎の門病院

高橋敬一, 木下優子, 佐々木総子, 塩田恭子, 東梅久子, 山田義治, 横尾郁子, 宮川智幸, 伊豆田誠人, 佐藤孝道

【目的】イデア^Rクラミジア(以下単にイデア)で子宮頸管部のクラミジア抗原が陽性であった検体を用いて, PCR法により血清型の判定をおこない臨床的意義を検討した。【方法】クラミジアの検査が必要であると判断した婦人に対し, 子宮頸管部より2本の綿棒で同時に頸管細胞を採取し, イデアで陽性であったペアの保存検体をPCRに供した。PCRで, クラミジアの主要外膜蛋白(MOMP)をコードしている遺伝子(OMP1)配列の, 4つの変異ドメイン領域のうち, 3つ(VD I-III)を含むようにプライマーCMT1とCTM8を設定し, 血清型の識別はPCR産物をAlu I, EcoRV, HindIII, Taq I, Hha Iの制限酵素で処理し, 消化物を電気泳動にかけ, そのパターンを解析して識別した。【成績】イデア陽性検体は45症例, 46検体あり, PCRで識別できたものは35症例, 36検体だった。冷蔵保存検体では27検体すべて検出可能だったが, 冷凍保存検体では19検体中9検体, 47%のみが検出可能だった。トラコーマ結膜炎にみられるとされるAからC型の中では, B型が2例認められた。D型は9例26%と最も多く, E型は8例23%, G型は7例20%, K型は3例9%あった。第四性病に關与するL型はなく, D, E, G型で全体の69%, およそ7割を占めた。また血清型識別が可能であった35症例はすべて単一の血清型であり, 異なった血清型の混合感染を示す症例はなかった。【結論】下腹痛・卵管閉塞など, 卵管炎や骨盤腹膜炎を疑う症状を認めた症例は9例あった。D型4例E型2例, G型2例, K型1例であるが, D型では9例中, 4例44%が子宮頸管炎にとどまらずに骨盤腹膜炎の臨床症状を示し, D型は骨盤腹膜炎へと進行する可能性が強い事が示唆された。

P-38 PCRとdot-blot hybridizationを用いたChlamydia trachomatisの型別診断とその臨床的検討

順天堂大

斉藤十一, 金子隆弘, 宮崎亮一郎, 鈴木正明, 三橋直樹, 高田道夫, 桑原慶紀

【目的】Chlamydia trachomatis(CT)は15型に分類され, A-C型は結膜炎, D-K型は泌尿生殖器感染に多いとされていた。しかし, 近年その血清型分布の変化を示唆する報告がみられる。また, 従来法では異なるCT型による混合感染の診断は困難であり, その結果の信頼性が疑問視されていた。そこで, 混合感染においても対応できるCTの型別診断法を確立し, 臨床的に検討した。【方法】各CT型に共通なMOMP領域をPCR法で増幅し, dot-blot hybridizationにより型別した。用いたprobeは15種類の各CT型に特異的なものとし, 6つのpool probe (PP)を作製してどのCT型も異なった2つのPPと反応するように設定した。本法を15型のCT標準株およびCT陽性であった子宮頸管炎41例, 結膜炎4例に施行した。【成績】本法により標準株はすべて推定通りの結果を示した。子宮頸管の結果は, A型1例, B型3例, D型7例, E型5例, F型7例, G型4例, H型2例, I型4例, K型2例, PPの1, 2, 6と反応した検体5例(α 群), PPの3, 4, 5と反応した検体1例(β 群)であった。 α 群を解析したところ, いずれもI型の亜型であるIa型と判明した。 β 群を解析したところ, G型とK型との混合感染であり, 混合感染率は2.4%(1/41)であった。結膜検体の結果は, D型2例, E型1例, H型1例であった。【結論】本法によりCTの15血清型およびIa型が診断可能であり, 混合感染の診断にも応用できることが示された。また, 結膜炎と子宮頸管炎では型に差がなくなっていることが示唆された。